

## 甘くはないか

京都造形芸術大学の寺脇教授は、「ゆとり教育世代大学へ」と題して北海道新聞に一文を載せています（6月22日付）。

その中で寺脇教授は、「02年度から実施された新しい教育（マスコミでは「ゆとり教育」と呼ばれている）の申し子といえる世代が、いよいよ大学生になったのだ。（中略）「ゆとり教育」バッシングの嵐が吹きまわったが、私は以前から、この世代が大学に入るときが真の評価を下すべきタイミングだと主張してきた。教育の成果は、短期間では計れない。

大学生になって真剣に学ぶことができるか、また自分の将来を明確に意識できるかがカギだと思っていた。もし、12年の新生が、昔のようにただなんとなく偏差値で大学を選び受け身の姿勢で授業に臨むものが大半というありさまだったとしたら、たしかに「ゆとり教育」は大失敗と詰まられても仕方あるまい。」と述べています。そして、「わたしの属する京都造形芸術大学と理事を務める東北芸術工芸大学の入学式では、いずれも新生の「入学の辞」が例年にも増して光っていた。」と評価しています。

寺脇教授は、そうした学生たちを見て、「ゆとり教育」10年間の成果が出始めたという認識をお持ちであり、「ゆとり教育」に批判的な方々に対して、今年入学してきた学生たちを見て評価して欲しいと述べています。

寺脇教授は、文科省の中で積極的に「ゆとり教育」を推進してきた方で、「ゆとり教育」に対して積極的な評価をされるのは分からなくもありませんし、実際、同氏の周りにはものの考え方もしっかりしていて、優秀な学生が多いのかも知れません。しかし、現実には、大学自体が偏差値で輪切りになっているといわざるを得ませんし、大学生も、意欲的に学んでいる学生がいる一方で、何のために大学生になったのか分からない、いわゆる「名ばかり大学生」もまた多数存在しています。

こうした現実を見る限り、「ゆとり教育」10年の成果が出始めたとは評価するのは、いささか早計ではないかと感じています。

「ゆとり教育」は、知識偏重の詰め込み教育から脱皮するため、学習時間と

内容を減らし、ゆとりある学校を目指そうとするもので、1980年度、1992年度、2002年度から施行された学習指導要領の改訂に沿って実施されています。

寺脇教授は、学習指導要領が全面的に改正された2002年度から「ゆとり教育」が始まったとしていますが、小学校は1980年度から学習内容や授業時数の削減などが行われていすので、私は、この時点からゆとり教育は始まったと考えても良いのではないかと考えています。

いずれにせよ、何故「ゆとり教育」が導入されるに至ったかといえ、当時、いじめや不登校問題、更には少年の凶悪な非行が多発しており、これが、詰め込み教育や過度の受験競争のせいであるとされ、これを改善するためには、学校で教える内容を削減して子ども達にゆとりを持たせることが必要だというのがその理由でした。

更にいえば、「ゆとり教育」導入の背景として、当時週休二日制の導入など勤務時間短縮に向けた動きが活発であったことも忘れてはならないでしょう。

教育関係者に、子ども達にゆとりを持たせれば、「自ら学び、自ら考える」事が身に付き、「生きる力」を育むことができるという、ある種の期待があったことも事実だと思います。

この結果、上述のように学習指導要領が逐次改定され、教科書で教える内容は大幅に削減されると共に「総合的な学習の時間」などが盛り込まれることとなったのですが、子ども達に「ゆとり」を与えれば自分で考える力が身に付くなどという事は、全くの虚構だったといわざるを得ません。

勿論、「ゆとり教育」が様々な体験を通じながら自ら問題を発見し解決していく力を身に付させようとしたこと自体は、否定すべきものではありません。

知識だけではなく、PISA型の学力調査において問われているように知識を応用する力が重要であることは明らかです。そういう意味では、「ゆとり教育」が目指そうとした事に一定の理解はできます。

しかし、「ゆとり教育」によって子ども達の学力不足が顕著になるだけでなく、「自ら問題を発見し解決していく力」の育成についても、期待した成果が出ているとはいえないと思います。

「個性を尊重し自主性を伸ばす」「させられる学習」から「自ら学ぶ楽しさに気付かせる教育」「指導から支援へ」と言葉は美しいのですが、基礎基本の知識をしっかりと教え込まなければ、自ら問題を発見し、解決していく力も育たないという事を、現実が良く示しているのではないのでしょうか。

「ゆとり教育」という美名の下で、基礎基本を教え込むことを知識偏重と遠ざけ、一方では、子ども達に対して、自ら学び、自ら新しい知識を習得して世界を広げて行くという力を十分付けさせる事が出来ていない、こうした状況について、教師としても責任がないとはいえません。

大津の事件を上げるまでもなく、いじめや不登校は依然として大きな問題となっていますし、小中学校のみならず、高校生や大学生の学力不足も深刻な状況にあります。結局、「ゆとり教育」によっては、学校が抱える根本的な問題を解決する事が出来なかったという事ですが、さりとて、「ゆとり教育」をただ全否定すれば済むという事でもありません。

新しい学習指導要領を展開するに当たって、「ゆとり教育」の何が良くて何が悪かったのか、しっかりと検証する必要があると思います。そうしなければ、「ゆとり教育」から「知識偏重教育」へと、また元来た道に戻るだけになってしまうのではないのでしょうか。(塾頭 吉田 洋一)